

新奇談クラブ

第三夜 お化け若衆

野村胡堂

青空文庫

第三の話の選手

「道具立てが奇抜だから話が奇抜だとは限りません。私の秘蔵の奇談は、前半だけ聞くと、あり来りの講釈種の如く平凡ですが、後半を聞くと、聊齋志異か剪灯新話にある、一番不思議な話よりも不思議な積りです。どうぞ、途中で——何んだつまらない——なんて仰しやらずに、最後の一句までお聴きを願います」

第三の「話の選手」増田晋は、斯う言つた調子で始めました。

「——娘心を捉えしは誰そ——という存分にロマンチックな標題を掲げて、私の話は、いきなり享保二年の早春、江戸神田橋外の舞台に移ります」

奇談クラブの集会室は、夢見るような微光の中に、春らしく更けて行きます。

奇怪、閨の若衆

桜子はふと眼を覚しました。

そんな場合によくある、襲われるような不快な心持などは微塵みじんもなく、春はる雨さめの降り頻しきる朝、護持院の鐘の音に、淡い夢から揺り起される時のような、何んとも言えない甘美な心持で、薄眼を開いて、そつと四方あたりを見廻したのです。

誰やら、其の辺に居る様子——。

多分小間使のお春でしょう。

桜子はそう思い乍ら、もう一度うとうとしかけましたが、夜の物が厚かったせいか、少し汗ばむような気がして、我にもあらず、もううで双腕を浅く抜いて、絹夜具の上へ投げました。

「……………」

今度ははつきり人の気配を感じます。

と、娘の敏感さで、一瞬の間に眼が水の如く冴えて、異常な亢奮に、胸の鼓動が高鳴ります。

「誰？」

片肱を枕に突いて、物音のした方を屹と見ると、有明の絹行あんど

灯ん——少し丁子が溜って薄暗くなった蔭、政信の描いた二枚折

びようぶ
屏風から、一人の色若衆が脱け出して、畳に片手を突いたなり
首を少し傾げて、凝つと此方を見詰めて居るのでした。

「あッ」

桜子の声は喉のうちに消えて、軽い戦慄が、スーツと身体を
走ります。

眼を外そらそうとしましたが、それも叶いません。瞳は若衆に吸い
付けられて、厭応無しに、睫毛まつげの一本一本、着物の模様の一つ一
つまでも、読ませられてしまいます。

そのうちに、政信の絵から脱け出したのではなく、政信の描い
た若衆よりも、もっと艶麗な、もっと活いきいき々した美少年が、二枚
折の蔭から半身を出して、桜子の寝姿を、いとも惚々と眺めて居

るのだということが判然^{はつきり}わかりました。

藤色の大振袖、曙色にぼかした精巧の袴を着けて、前半に短か刀を一本、顔は、その頃の寺小姓や色子の風俗で、薄化粧をほどこし、笹色の口紅まで差して居りますが、頭は不思議に引つ詰めた一束の下げ髪、こればかりは、全体の派手な調子と相応しません。

併し、何んとなく淒味があつて、美しいうちにも、鬼氣が迫ります。

「お前は、お前は何んだえ？」

桜子は辛^{から}くも口を切りました。

が、枕に凭れた腕^{かいな}が顫えて、腑甲斐なくもシドロモドロになり

ます。

寝乱れた美女の、わななく姿は、得も言われない魅惑だったでしょう、怪しい若衆は、暫らく凝つと瞳を据えましたが、やがて、「お許し下さい桜子様、お慕い申してこれまで参りました。決して怪しい者では御座いけません」

と申します。

五音の調子が少し外れて、礼儀正しい一粒選りの言葉のうちに、何んとなく享保二年の江戸の町には通用しそうも無い、一種言うに言われぬ古めかしさがあります。これが怪しくなくて、一体何が怪しいでしょう。

物の本にある狐狸の業か、それとも、かわうそおろち獺か大蛇の怪か、いずれ

にしても、正面まともの人間とは思われません。

桜子はゾツと身を顫わせました。

「桜子様、深い深い因縁の結ばれた、私と貴女あなたで御座います。決して淫らな心持で参ったのでは御座いません。——八重の関を越す骨折は、並々では御座いませんが、明日あしたの夜もまた忍んで参ります。どうぞそれまでに、よくよく思案を定めてお置き下さい。

——さらばで御座います、おいとしい桜子様、構えてこの事は人に仰しやいませんように」

紫の雲が揺ぐように、若衆の姿は二枚折の蔭に隠れると、其の儘音もなく消えてしまいました。

護持院の暁の鐘。

桜子はゾツと襟をかき合せました。緋鹿の子を絞った長襦袢が少し崩れて、燃えるような紅の綸子りんずの夜の物が、砕けた花片はなびらのように桜子の膝を埋めます。

浪曼主義者桜子

江戸、神田橋外に一町四方の屋敷を構え、苗みょううじ字帯刀を許されて、將軍家お金御用達を勤むる相あいおい生せい総左衛門、最早六十左右の老体ですが、今年取つて十九歳の、桜子というのがたつた一粒種、本当に簪かんざしの花も、掌中の珠も及ばず、手塩にかけていつくしみ育てました。

これがまた、たった一つ実^なった果物のような素晴らしい出来栄、歩めば大地の上に、歩一步花が咲くのではないかと思われる位い、暗闇の中に置くと、かぐや姫のように、輝いたと云われる程の美しさです。

これだけ美しくなると、娶^{めあわ}合せるような人間の男は、そうザラに転がっては居りません。縁談は降るようですが、選り好みするともなく、到頭十九の春を迎えてしまいました。

父の総左衛門は、取る年と共に気があせって、いろいろ娘の心を引いて見ますが、まるで相手にしません。毎日自分の部屋に籠って、黄表紙、青表紙を読み耽り、女だてらに理窟のひとつもわかると、今日の言葉で言えば、だんだん理想が高くなって、婿の

口などは、振り向いて見ようもしないのです。

日本橋の呉服問屋の次男、歌舞伎役者のように美しい上、三千両の持参金附でというのがありましたが、桜子は軽蔑し切った様子で、取り合いません。

千五百石取の旗本の弟、学問武芸何一つ暗からぬ人物が、身を落して入婿してもという話もありましたが、桜子は唯頭かぶりを振るばかり、

「それではお前、公坊様でも婿にとる気か、女も厄やくと言えどももう臺とうが立つ、世間の手前もあることだから、気に入ったのがあったら言つて見るが宜い——」

父親の総左衛門は、到頭こんな愚痴まで娘に聞かせて居ります。

「お父様、御免下さいまし。私はお金や学問や武芸を鼻にかける男は、たったそれっ切りのような気がして、どうも心に染みません。世の中には、もう少し深味のある、奥底の知れない殿御は無いもので御座いましょうか」

和漢の物の本などに眼をさらした為でしょう、桜子は何時の間にやら、素晴らしい浪漫主義者になり切って居るのです。

丁度此の時、桜子の前へ、思いがけない若衆が、申し分の無い神秘的な雰囲気をもたらし現れたのです。

最初は恐ろしさで一杯、夜が明けたら、早速父親に話して、何とかして貰う積りでしたが、明るい陽の光の下で考えると恐ろしさは霧の如く消えてしまつて、妙にやるせない物足らない心持

だけが残るのでした。

そして藤色の大振袖、精巧の袴——と言った、歌舞伎芝居へ出て来るような時代めかしい身みなり扮や、政信の絵から抜け出したような、涼しい眼、豊かな頬、紅の唇の幻まぼろし影が、次第になつかしいものにさえ変って行きます。

財産自慢や学問武芸自慢の男達に比べて、それは又何んというへだた距りでしよう。二枚折の蔭から片手を突いて、たしなみ深く差しのぞく優しい物腰し、物言いの古めかしい上品さ。

——そんな事を考えて居るうちに、桜子は、約束した今宵が待たれるような心持にさえなり切って居りました。

怪異を待つ娘心

四方が暗くなると、さすがに不気味さが蘇^{あたり}えます。

そして狐狸とも妖怪とも、素姓の知れない若衆を待つ心持になった自分が^{ひしひし}轟々と浅ましくなりますが、それかと言つて、今更一埒を人に打ち明ける気にもなりません。

不思議な力に引き摺られて行く、娘心の^{ミステリー}神秘とでも言いましょうか、焦躁と不安と、恐怖と期待とのうちに、その夜も次第に更けて行きます。

待ち疲れた心持で、何時ともなしに桜子は眠りに陥ちて居りました。

揺籃の中で眼を覚した赤ん坊のような心持で、フト眼を開いて見ると、矢張り二枚折の蔭に、藤色の大振袖を着た、美しい若衆が思案に余る風情でシヨンボリ坐つて居ります。

「あッ」

それでも軽い驚きの声が、桜子の唇を漏れます。

「お目覚めで御座いましたか桜子様」

二人はソツと顔を見合せました。

誘われるように、桜子はニツコリして、思わずハツと顔を引き緊めます。

「お帰り、お帰りッ、もう此処へ来てはいけない。大きな声を出して人を呼びますよ」

急に、娘らしい恐怖が蘇返った桜子は、床の前に起き上り乍ら、それでも低い声で斯う言いました。

こんな事を期待するともなく、今宵は帯を解いたまま、平常着ふだんをそっくり着た桜子は、床の前へキチンと坐ると美しい顔を硬ばらせて見せます。

「何を仰しやるのです桜子様、貴女の本心は決してそんな筈は無い、ツイ先刻までは、心待ちに私を待つて入いらしたでは御座いませんか」

「エ？」

凶星を指されて、桜子は思わず顔を赧はにかめました。

「何も彼も存じて居ります。父上様に仰しやろうとは思ひ止ま

った事も、小間使のお春に、側へ寝てくれと一度言い付けて、後からそれには及ばないと断ったことも――」

「エ、エ？」

「何も彼も存じて居ります、桜子様は私の来るのを、心待ちにお待ちでした」

怪しの若衆は畳ざわりも滑らかに、スルスルと差し寄つて、思い乱るる桜子の膝の上へ、そつと手を置きました。

思いの外温かい手。

桜子はゾツとして身を狭めました、もう声を立てる気も、追いつける気もありません。

「お話申しましょう、桜子様」

男にしては少し艶あでやか過ぎる顔が、近々と桜子を差しのぞきま
す。

斑々たる獣の足跡

三日目の晩、二人はもう隔てもなく打ち解けて居りました。

「お前の名は、何んと云うの？」

あやまろ
「綾磨」

「まあ、何んという古風な名でしょう」

桜子は可愛らしい掌てのひらを揉むように摺り合せて、自分の頬へ当て
たりしました。

「家は？」

「ツイ其処」

「とうとう？」

「神田橋の下」

「まア」

何んと言う他愛の無さでしょう。神田橋の下には、汚なく濁った水と、冷たい石垣としか無いのに、桜子はそれを怪しむ気さえもう無くなっていたのです。

四日目の晩。

二人は火桶を囲んで、話したり笑ったり、双六すごろくをやったり、見合せをやったりして居りました。

五日目の晩は、床の上へ雛のように並んで坐つて、肩と肩とをもたれ合せ乍ら、二人は真紅まっかの紐で綾取りをして居たのです。

広い屋敷の中、暫らくは誰知る者も無かつたのですが、近頃桜子の変つた様子に気が付いたのは、長年側に付いて居た忠義者の小間使のお春でした。

雀の子のように朝早く起きた桜子が、近頃大変朝寝をするようになったり、一日妙にぼんやりして暮して居るのに、日が暮れると急にソワソワし始めたり、今まで必ずお春を隣の部屋に寝かしたのが、近頃疳たかが亢たかぶると言つて、幾間も幾間も隔てて寝かしたり――。

勘定して来ると沢山ありますが、一番お春に心配したのは、

桜子の寢室から、夜半過ぎになると、何やらひそひそ喃々と語る声や、忍び笑いの声が漏れて来ることでした。

七日目の晩、お春は到頭辛抱し切れなくなりました。ソツと忍んで行つて、昼のうちに作つて置いた、障子の隙間から覗くと、何んと言うことでしよう。

床の上に桜子と押し並んで坐つたのは、見も知らぬ美しい若衆、肩と肩と、頬と頬と触れるばかりに、真紅の紐で仲睦むつまじく綾取りをして居るではありませんか。

「あら、又間違えたでしょう」

「御免なさい、桜子様」

四つの白い手に、真紅の紐が蛇のように絡からんで、涼しい眼と眼、

可愛らしい唇と唇が誘い合うようにニツコリします。

藤色の大振袖と、緋鹿の子の長襦袢と、精巧の袴と、紅綸子の夜の物と、何んという妖しい取り合せでしょう。

お春は全く気が遠くなるようでした。

桜子の美しさは、日頃見馴れておりますが、それと寄り添う若衆の美しさも、此の世の者とも思われません。

膝と手とで歩くようにして引き揚げたお春は、その足ですぐ、主人総左衛門の寝所の障子を叩きました。

「旦那様、大変で御座います」

「何んだ騒々しい」

飛び起きた総左衛門、障子を開けると、廊下にお春はガタガタ

顫えて居ります。

「何うした、お春じゃないか」

「ハイ、お嬢様のお部屋に妖しい者が——」

「馬鹿な事を言え」

「いえいえ本当に御座います。芝居へ出て来る若衆のような、それはそれは美しい男で——とても人間とは思えません」

「兎に角行つて見よう、あまり騒ぐな」

廊下伝い、娘桜子の部屋の外へ来て見ると、内は※^{げき}として、何んの変りもありません。思い切つて障子を開けると、有明の行灯に照された床の中には、娘の桜子が唯一人、いとも安らかな息づかいで眠つて居るのです。

「何んだ、娘の外には誰も居ないではないか」

「ハイ」

「つまらぬ事を言いふらしてはならんぞ」

総左衛門は以つての外の不機嫌な様子で、廊下へ一步踏み出しましたが、何を見たか、ギョツとした様子で立ち止まりました。

「お春、手燭を持って来い」

「ハイ」

自分の部屋へ飛んで行って、紙燭を持って来て見ると、廊下は斑々たる獣の足跡。

「あッ」

お春は到頭手燭を取り落して、へた張ってしまいました。

高蔵人登場

お春には固く口止めして、それとなく邸の内外を堅め、蟻の這い込む隙間も無いようにしましたが、何んの役にも立ちません。

水も垂れそうな若衆は、雨戸の隙間からでも潜り込むものか、その翌晩も、その又翌晩も、風の如く入って来て、風の如く帰ってしまいます。後に残るものと言つては、斑々たる廊下の足跡だけ。総左衛門も全く手古摺てこずつてしまいました。

フト思い付いたのは、護持院の役僧で、加持祈祷にすぐれて居るという評判の隆順です、日頃顔見知りのことでもある、出向い

て懇々と頼み込むと、

「それはさぞ御心配、多分お濠に棲んでいる獺の悪戯わるさであろう、拙僧わしがちよいと退治して進ぜる。娘御には何んにも仰しやらぬが宜しい」

恐ろしい安請合やすうけあい。

その晩からやって来て、夜つぴて有難いお経を上げてくれますが、怪異は風の如く入って来て、矢張り娘の桜子と一夜睦まじく語り明かして帰ります。

屋敷の外は庭男、下男、出入の鳶とびの者、植木屋などが、水も漏らさずと警戒して居りますから、苟いやくも人間の形をしたものならば、見とがめられずに出入するということは、思いもありません。

三晩の修法も何んの験しるしもなく、隆順は少し照れ臭く引き下つてしまいました。それに代つて呼び込まれたのは、俗に祈りの道六と言う、その頃高名な修験しゅげん者じゃ、

「如何なる悪魔けしやう化性の者と雖いえども、私の禱いのりに退散しないという事は無い」

という見識、されば一室に護摩壇を築き、秘仏かんじんを勧進かんじんして、三日三夜の間、揉みに揉んで熱禱ねつを捧げましたが、それとても、何んの験しるしありません。

相生総左衛門、思案に余つた揚句、最後に眼をつけたのは、神田三河町に、佐分利流の槍の道場を開いて居る、高蔵こうのくらんど人という浪人者でした。

最早五十幾歳という年配ですが、槍を取つては、当時府内に並ぶ者なしと言われた名人、何う言うものか仕官を嫌つて、心長閑のどかに諸家の子弟を教え乍ら、町道場の一人暮しをして居たのです。

或る日稽古の暇を見はからつて訪ね、初対面乍ら、恥を打ち明けて懇々と頼み込むと、二つ返事で引き受けてくれるかと思うと大違い、

「それは困つた、拙者せっしゃ佐分利流の槍は指南するが、まだ妖怪變化に逢つた覚えは無い。名ある高僧や修験者達の手に及ばないものが、拙者の手で安々と退治される筈も無いだろう。気の毒だが、他の優れた武辺者に頼んでもらい度い」

と言うのです。

一応尤もな言葉ですが、左様で御座いますか、では歸られませ
ん。

「爾^そう仰しやらずに、どうぞ、父娘^{おやこ}の命をお助け下さると思つて、
お出を願ひ度い」

総左衛門は涙を流さんばかりに頼み込みます。

「それでは兎に角行つて見ることに致そう、成否のほどは受け合
い難い」

「有難う御座います」

「ところで、相手は千里を見通す怪異の仕業では、これも余計な
要心かも知れぬが、念には念を入れるのが武道の嗜^{たしな}み、——此処
へ頼みに来られた事も、拙者が今晚出かけることも、一切他言無

用に願ひ度いが御承知だろうな」

「それは心得ました」

「今夜、正子このつ刻に庭先まで忍んで参る。娘御の寢所から、あまり遠くない雨戸を一枚明けて、そつと引き入れて貰ひ度い」

「かしこまりました。何も彼も私一人が呑み込んで御案内いたします」

「確しかと頼みましたぞ」

「ハイ」

総左衛門は暇いとまを告げてそつと帰りました。

大鳥の如く月の庭へ

享保二年正月ある夜、わけても月の美しい時分でした。

高蔵人は身みごしらえ拵りり凛々しく、両刀を手挟たんだ上に、六尺柄かいし皆

朱ゆの手槍ひつさを提げて、相生総左衛門の屋敷に忍び込みました。

奥庭へ廻つて、予かねてしめし合せた雨戸に触ると、総左衛門は内からそつと開けてくれます。

「御苦勞様で御座います」

「シツ——」二人は其の儘廊下の闇に身を潜めました。

一刻ばかりすると、二た間三間距てて娘桜子の部屋で、何やら物の気配がします。

二人の老人は、両方から廻つて、廊下の左右から詰め寄せ、娘

の部屋の前で顔が合うと、

「それッ」サツと障子を開けました。

中からは大鳥が立つように、藤色の大振袖が翻ります。

「あれーッ」というのは娘の悲鳴。

怪物は主人総左衛門を突き飛ばして、廊下へ真っ直ぐに逃げ出し、勝手口の大納戸^{なんど}へ入ろうとしましたが、此処は早くも戸を締め切っております。

後ろからは、

「曲^{くせもの}者待てッ」りゅうと追い迫る笹穂の手槍。

退路を絶たれて、元の廊下へ帰った振袖姿は、先刻高蔵人が入り込んだ雨戸が、僅かに閉め残して居るのを見付けて、蹴^{けはず}外すよ

うにパツと外へ飛び出しました。

「己れッ、逃がすものか」年は取つても、武術で鍛錬した高蔵人、続いて手槍を構えたまま庭へ跳びます。

「あれ、父上様」

桜子は部屋から転び出るように、続いて追ひ迫ろうとする父親の裾を犇と掴んだまま、絶え入るばかり、縁側の月光の中に泣き伏しました。

手槍は鐘を貫いた

大振袖を着た怪物は、月下の庭を突っ切つて、隣の護持院の境^け

いだい
内に逃げ込んでしまいました。

言うまでも無く護持院というのは、將軍綱吉の生母、桂昌院のきえ帰依を得た僧隆光の為に、元禄元年三月、神田橋外の地を相して建てた七堂伽藍で、その結構は眼を驚かすばかり、徳川最盛時の財力を傾けて建こんりゆう立しただけに、本堂の如きは、上野の寛永寺にもまさると言われた程です。

怪異は真一文字にその境内に飛び込んだのですから、追い縋つて来た高蔵人も驚きました。

併し、脅しや冗談でやって来たわけでは無く、相手は妖怪変化ですから、お寺の境内であつたところで、此のまま見のがして引き返すわけにも参りません。

尤もその頃は綱吉も桂昌院も死んで、さしもの護持院もすつかり勢力を失い、綱吉に殺^{せつしよう}生の禁を勧めて、三十年間天下を苦しめた怪僧隆光は、崇りを恐れて故郷の長谷^{はせ}へ逃げ出し、護持院は名題の札屋敷を取り毀^{こわ}し、銅瓦を売り払って維持の料に当てるという有様、手槍を提げて境内へ飛び込んだところで、別にとがめ立てする者ありません。

「己れツ、変化待てツ」

暫らくは木立を潜り、石灯籠を小楯に取り、縦横無尽に逃げ廻って居た怪物も、到頭高蔵人の鋭い槍先に追い詰められ、門前の鐘楼目がけて、バタバタと駆け登ってしまいました。

鐘楼と言ったところで、これも型ばかり、去年の秋の嵐に半ば

崩されて、大釣鐘も落ちかかつて居るような有様、其処へ藤色の大振袖を翻した怪異が、笹穂の手槍に追われて、三、四回ぐるぐると繞るうち、逃げ場を失つて、落ちかかつて居る鐘の下へ、パツと飛び込んでしまいました。

アツと言う間ありません。

鐘楼は一とたまりも無く崩れて、釣鐘は怪異の上へガバと落ちてしまいました。鐘に心あつての事か、兎に角、不思議な廻り合せです。

その内に、夜中乍ら多勢の者が騒ぎを聞いて駆け付けます。

息せき切つて飛んで来た相生総左衛門も、此の様子には全く仰天してしまいました。

「先生、如何で御座いました」

「お、御主人か、くせもの曲者は鐘の中へ伏せられた。が、世上の為、

止めを刺して置こう」

こうのくらんど

高蔵人、崩れた鐘楼の上に突っ立ち上り大釣鐘を睨んで槍を
をしごいて居りました。

「して、あの正体は？」

「今にわかる、御覧下され」

一歩下つて、鐘を見込んだまま、皆朱の手槍を流儀に構えまし
た。

傾きかかる月を受けて、高蔵人の引き緊った顔の半面と、笹穂
の尖が青白く光ります。

「エーツ」

と一喝。

電光の如く槍をくり出すと、鐘楼の上に伏せられた鐘は僅かに喝^{かつ}と鳴って、槍の笹穂を千段巻まで吞みました。

鐘は左^さまで大きくないと言つても、人間一人を吞んだ位ですから、薄いところでも肉が二寸あまり、或は三寸もあつたでしょう、それを楽々と貫いた手練は実に恐る可きものです。

引き抜くと穂先にはベツトリ血汐。

「手応は充分、大急ぎで鐘を起して貰い度い」

高蔵人は、血染の手槍を毘沙門突に斯う言います。

振袖を抱いて深讐の家へ

相生家の小者が多勢たかつて、漸く鐘を引き倒したのは、かれこれ寅刻近くなつてからでした。その下から現れたのは、半面斑の見るからに恐ろしい怪物と思いきや、昨夜のままの、藤色の大振袖を着て、痛々しくも紅に染んだ美少年の姿です。

人間に化した怪異は、陽に照されれば本来の姿を現すと言いますが、不思議なことにこれは、昇る朝日に赤々と照されても、狸にも獺にもなりません。少し物足りない心持で、苦痛に引き歪められた若衆の顔を見て居る内に、

「どうも見た事のある面だ」

などと言い出す者があります。

段々調べて見ると、見たことがあるも無いありません。相生家に久しく仕えたうまやばん厩番で、綾吉と言う若者の変装姿に紛れもなかったのです。

「やア、お前は綾吉じゃないか、何んと言う変な風をするんだ」
雇人達は大変な騒ぎ。

怪異と思つたのが人間で、しかも自分の家の奉公人では、相生総左衛門が黙つて居るわけに行きません。鐘ごと突いた高蔵人も、何んか裏切られでもしたような心持。

「これこれ内密に調べることがある、お前達は皆んな遠慮するがいい」

総左衛門の聲が掛ると、雇人小者達は悉く鐘樓を降りましたが、それでも燃えさかるような好奇心に、左まで遠くへも行かず、遠巻にしたままで下から眺めて居ります。

「確りしろ、これ、お前は厩番の綾吉に相違は無いしっかか」

高蔵人は、差し寄つて抱き起こしました。脇腹をえぐられて居りますから、傷は浅いが急所で、とても助かる見込はありません。

「ハイ」

「何んと言う事を仕出しでかしてくれたのだ、日頃目を掛けてやって居る主人に、恩を仇の振舞ではないか」

苦痛に打ち顫う綾吉の肩に手を掛けた主人の総左衛門は、今更乍ら愚痴めかしくなります。

「旦那様、この藤色の振袖に見覚えはありませんか」

「何？」

手負が不意に妙な事を言い出すので、総左衛門も思わずギョツとしました。朝陽を正面に浴びたところを見ると、染色も褪せ、地も摺り切れて、見るかげも無い振袖ですが、昔はどんなに美しかったです。

「これは母の形見、私に取っては、思い出の深い振袖で御座います。」

「……………」

手負は僅かに身を動かして、懐かしそうに肩から袖へ、朝陽の淀む自分の振袖を眺め廻しました。

「母はこの振袖を身に着けて、旦那様のお情けを頂きました」

「何、何？」

「もう三十年も前の話——、旦那様はどうにお忘れかもわかりませんが、一生に一度の恋をして、破れ草履のように捨てられた私の母は、それを怨み続けて亡くなったので御座います」

総左衛門は崩折れるように、引き倒された釣鐘に凭れました。

犇々と思い当る様子——、そう言われると、藤色の大振袖を着た三十年前の恋人の姿が、まざまざと老の眼の底に蘇返って来ます。門前の長屋に住んだ貧乏な仕立屋の娘お蝶、美しくも可愛らしくもあつた相ですが、相生長者の跡取息子と思ひ思われて、一時はどんなに喜んだことでしょう。親にせがんで、藤色の大振袖を

忝こしらえてもらい、お邸の木立の蔭、物の限などで、逢瀬の嬉しさを重ね、行々は相生長者の嫁にと、独り極めに夢のような楽しい日は続きました。やがて人を頼んで表沙汰の嫁入話になると、身分違いだからと剣もほろろの挨拶、それからどんなに呼び出しても長者の息子は姿を見せず、間もなく武家から美しい嫁が来て、母のお蝶はむしり捨てた花のように振り向いても見られなかった――ということです」

「……………」

「母の歎きはどの様に深かったか、捨てた男には思いも及びません。親達にそれ見た事かと言われるのも辛く、世間の人に顔を見られるのは尚お浅ましい、到頭家出をしてしって、せめて相生長

者を見返すような男をと、二度目に契ったのは、金も家も無いが、その代り器量だけは人並すぐれて立派な浪人者でした。間もなく生れたのは此の私——」

長物語に綾吉の苦痛は募る様子、我にもあらず、高蔵人の膝に縋つてホツと熱い息を吐きました。が、言うだけ言わなければと言つた勇猛心に促がされて、次第に死の色の濃くなり行く顔を屹きつと挙げています。

「夫の浪人者は、武術修業の為と言つて家を出たつ切り、三年経つても五年経つても帰りません。可哀想な母親は、二度目の男にも捨てられてしまったのです。それから氣が変になつて此の振袖を抱いたまま、怨み続けて死んでしまいました」

「……………」

「その忘れ形見の私が、素姓を包んで相生長者の屋敷へ住み込んだのは、言うまでも無い母の怨みを報ゆる為、——何うしたら腹の虫が癒えようか、長い間肝胆を砕きましたが、年取った旦那様に、思い知らせたところでまことに冴えない話、私は手段を変えて、お嬢様の桜子様を狙ったのです」

血潮の呪い

身につまされたか、総左衛門も、今は顔を挙げる気力もありません。鐘楼を取り巻く雇人小者達は、深い仔細は知らず、朝陽の

中に描き出された、この劇的情景を何時までも見詰めております。
「桜子様はあの通りの変った氣質、金にも器量にも、武芸にも心を^ひ轟かれる方ではありませんが、母の形見の振袖を着て、乏しいお小遣で手に入れた、能装束の袴を着け、浅ましい薄化粧までして、妖怪変化の心持で通った私がお氣に召して、相手を怪異とも人間ともわからぬ心持乍ら、深い契りを重ねました。廊下に付けた足跡は、両国の^{ももんじや}獣肉屋で手に入れた、^{むじな}貉の足のからくり——そんな事までして私は、お嬢様の並々でない物好きな心持を掴んだので御座います」

「……………」

「お嬢様はもう、昔々旦那様から、身分違いと言って捨てられた

者の子の種を宿しました。これで、母の怨みは報いたも同じこと——、それに、私の怨みも、何時の間にやら恋心に変つて、今ではお嬢様を心からいとしいと思うようになりました。殺されても、もう惜い命では無い——」

綾吉の話は其処でプツリと切れました。折から、鐘楼の段々を、取り乱した姿で、美しい桜子が駆け登つて来たのです。

「綾磨様」

高蔵人の膝から抱き起こすように、男を引き寄せて、頬と頬を、娘の涙は澆々^{さん}として、手負の唇を濡らします。

「桜子様、私は厩番の綾吉——」

「それも聴かぬではないが、私の為には矢張り綾磨様、お前をこ

んな目に遭わせて、何んという人達だろう、私も一緒に死んで上げるから、堪忍しや——」

綾吉の腰から、脇差を抜いて、あわや自分の喉笛へ突き立てようとするのを、高蔵人が危うく支えて、

「お待ちなされ娘御、死なねばならぬのは此の高蔵人であつた」
其の儘ズバリと自分の腹へ突き立てます。

「あッ、何故の生害」

驚きふためいて止める総左衛門を、左の手に払い退けて、

「お蝶を捨てて武芸修業に出たという此の者の父親は拙者だ」

「エッ」

「綾吉、許してくれ、若氣の至り、高名栄達にあこがれて、お前

と母親を捨てた罪は免れようが無い、二十年目に酬いられて、武芸自慢の槍先で自分の子を殺したのだ」

「父上」

綾吉は必死の苦痛を堪えて、右手を桜子に任せたまま、左に父親を探り寄りました。

「綾吉、この脇差は、お前の母へやった、形見の品だ、父子が斯うしてめぐり逢うのも因縁いんねんだろう、——もう思い置く事は無い」最早息も絶々の我が子を掻き寄せ乍ら、右手にキリキリと脇差を引き廻します。

朝陽はすっかり昇り切つて、鐘楼の上の凄惨な情景を、明る過ぎるほど明るく照しました。

×

×

「私の話はこれで終わりました」

第三の話の選手、増田晋は斯う言つて軽く一揖しました。

「護持院は、その翌る日の大火に焼け落ちて、七珍八宝は言うまでもなく、將軍綱吉の書いた額も烏有に歸し、その後大塚の護国寺に併せられて、形ばかり残つて居ります。時の人々は、鐘楼に血を流した呪いの為ではないかと取沙汰したそうです。

桜子は無事に男の子を生み落し、その養育に一生を捧げました。何を隠しましょう、かく申す私は、その血を引く子孫の一人で、増田というのは綾吉の姓になつて居ります。

高蔵人が手槍で貫いた釣鐘は、音が悪くなつたのと、血潮の呪

いがかかったので、間もなく鑄潰されてしまいました。武道の語り草に、これは保存して置きたかったものです」

青空文庫情報

底本：「奇談クラブ（全）」桃源社

1969（昭和44）年10月20日発行

初出：「朝日」博文館

1931（昭和6）年3月号

※冒頭の罫囲みは底本では波線です。

入力：門田裕志

校正：江村秀之

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新奇談クラブ

第三夜 お化け若衆

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>